

彼が「2世」である理由

在日朝鮮人 A さんの事例からの世代概念再考

立教大学 橋本みゆき

K.マンハイム (1928) は、世代とは出生時期という自然的事実に基づくものであるが、そこに人間の社会的相互作用がある点に世代の社会学的課題があるとした。本報告は、「チョソンサラム (朝鮮人)」「2世」A さんのライフストーリーにおいて、世代をどう捉えたらエスニシティの社会学として意味ある分析となるかを考える。

世代概念には大きく分けて、①コーホート、② (ある時期の現象を担った一群の人々の) ライフステージ、③家族リネッジという、3つの用法がある。在日韓国・朝鮮人研究においてはこれまで多くは③、時に①②の方法で世代を設定してきた (例えば①谷 2002、②福岡 1993、③小熊・姜 2006)。とはいえ、そこで描かれる在日 1世、2世、3世像は概ね重なっている。在日韓国・朝鮮人の世代は多くの場合、父系の渡日世代で数えられてきた。本報告はこの父系主義的・生物学的方法はとらず、また他の複数の世代概念を検討しながら A を位置づけてみたい。自然的な世代概念では世代別ステレオタイプの新たな生産にとどまり、当該世代の分析には至りにくいからである (cf. 金明秀)。

A は 1951 年生まれで A 県在住の朝鮮籍男性である。もと朝鮮学校教員の妻が切り盛りする焼肉店を手伝いながら、朝鮮総連での「ボランティア」を続ける。A の父は 1940 年に朝鮮南部から渡日した。A の実母は日本人で、A が幼い頃に病死。父が朝鮮人女性と再婚すると、A の家庭の食卓には朝鮮料理がのぼるようになった。A は、日本人とのつきあいが日常的にありまた朝鮮人が多く住む地域で「周りに育てられた」。その後寄宿舎のある朝鮮学校に入り、大卒後は教員になって以来民族組織の中で働いてきた。なお A の父はたいへん歌が好きで一時仕事にもしており、A も音楽に親しんで育った。そして A の長女は音楽を職業にした。

インタビューや分析では何度も立ち止まった。まず A の母親が日本人と聞いて家族系譜 (③) に迷った。また、地域性や時代背景を考えると在日韓国・朝鮮人専用コーホート (①) では不十分に思えた。さらに A はその時々々の政治情勢と絡む複雑な親族状況を経験している (②)。A の世代的な位置に接近するには、従来のような集合的観点からではなく個人の経験に即した、複数の軸を取り込むような世代論が必要だと思われた。

一見特殊な A の事例をあえて「2世」として論じる理由は、A が自らそう語ったことに加え、A のライフストーリーが必ずしも特殊ではないからである。在日韓国・朝鮮人家族の系譜関係の複雑さ、地域の日本人との同時代経験、国家的影響の個別性は、決して珍しくない。にもかかわらず、在日韓国・朝鮮人世代論にかかるとそれらは捨象されがちであった。A が 2世だというのは、一つに、朝鮮人として育ってきた自分が渡日 1世である父親 (と継母) そして日本人生母の子であるという出自を堂々と表明しようとしてきた構え (およびその困難さ)、また、音楽分野において父親から朝鮮の文化を受け取り、それが自分を經由して娘に伝わって娘の活動につながっているという世代継承の感覚に基づく。在日 2世というリアリティは血統や生年によってではなく、長い間の家族関係経験や多面的な相互作用によって形成されたのである。

在日韓国・朝鮮人のこうした世代感覚形成は、ニューカマー研究においても示唆的な先行例となるのではないだろうか。